

石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民

—トルコ、チャクマックテペ遺跡第4次調査(2024年)—

三宅 裕 筑波大学人文社会系教授
板橋 悠 筑波大学人文社会系准教授
石田 温美 日本学術振興会海外特別研究員
シャーヒン・ファトマ チュクロヴァ大学文理学部准教授

Hunter-gatherers Living on the Top of the Limestone Hills: The 2024 Seasons of the Excavations at Çakmaktepe, Turkey

MIYAKE, Yutaka Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
ITAHASHI, Yu Associate Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
ISHIDA, Atsumi Overseas Research Fellow, JSPF
ŞAHİN, Fatma Associate Professor, Faculty of Humanities and Natural Sciences, Çukurova University

1. はじめに

トルコ共和国南東部に位置するシャンルウルファ県は、2010年代前半のイスラム国(IS)の勢力伸長や日本人ジャーナリスト殺害事件以来、長らく外務省の海外渡航安全情報において「レベル2」に指定されたままの状態が続いていた。ようやく2024年前半に「レベル1」に引き下げられ、日本からのツアー客の足も戻りつつあるようである。この間、研究機関によっては外務省の情報に基づいて、学生・大学院生の渡航禁止措置を取っていたところもあり、特に大学院生の教育や研究に支障をきたすような状態が続いていた。私たちがシャンルウルファ県で調査を始めて2024年で3年目になるが、今回初めて大学院生も調査に参加することができるようになり、ようやく「正常化」を実感することができた。

2. 15号建物の調査

2022年に実施した発掘調査の際に、G7区南東隅から検出された9号建物とH8区から検出された15号建物は15m近く離れた位置にあったが、ともに壁際から焼けた動物の頭骨や角が出土し、床面の状況も互いによく似ていたことから、同じ一つの建物を構成している可能性もあるのではないかと推測されていた。しかし、両者をつなぐ中央部分には、そこを横切るような形で電線と電柱が立てられていたため、直ぐに発掘に着手することができない状況が続いていた。ようやく2024年の調査前になって、電線と電柱が無事に

撤去される運びとなり、この区域の調査が可能になった。

その結果、表土直下から石列が検出され、9号建物から延びる壁と15号建物から延びる壁とがつながることが明らかになり、推測していた通り一つの建物となることが事実となった(図1)。建物の名称については、動物骨がすでに多数検出されていた15号建物の方を優先させ、15号建物とすることとした。建物の大きさは直径が約15mにも及ぶことが判明し、焼けた動物の頭骨など儀礼の痕跡と考えられる証拠も伴っていることから、この15号建物は公共建造物的性格をもった「特別な建物」であったと考えることができる。チャクマックテペ遺跡では、2022年の調査で長軸が16mを超える10号建物が検出されており(三宅



図1 15号建物検出状況。チャクマックテペ遺跡で2基目の特別な建物。

ほか 2023、2024、Şahin et al. 2024)、15号建物は2基目の特別な建物ということになる。両者は比較的近接した位置にあるが、ともに半地下式の建物で切り合っていないことから、現時点でその先後関係を正確に把握することはできない。この2基の建物が同時に機能していたことを積極的に否定する材料もないが、15号建物がその西方に位置する建物を一部壊して構築されていることから、現状では10号建物がまず構築され、それが廃絶された後に15号建物が構築されたと考えておきたい。

2024年の調査では、15号建物の南側部分を中心に作業を進めた。半地下式の構造である15号建物は、一部石灰岩の岩盤を掘り込んで構築されていることが明らかになった。岩盤を掘り込んだラインと一致する主要な石列・壁に加え、その外側と内側にも石列が検出され、全体としてはやや複雑な構造をしていることが確認された。主要壁の外側(南側)から検出された弧状の石列部分についてはまだ調査が完了していないものの、周囲で確認されている岩盤のレベルからみて、それほど深くはならないと考えられる。古い時期の壁というよりは、建物に付加された付属施設として位置づけられるものと思われる。建物内の石列は床面の直上から検出され、東西両端は途切れているものの、主要な壁のラインとほぼ平行する形で、ブロック状に整えられた石が一段だけ並べられている。この石列が途切れる西端付近からは、床面のほぼ直上から皿形の石製容器、鉢形の石製容器、ほぼ完形に近い石皿が出土した。原位置からこれらの遺物が検出されたことは重要であり、付近から出土したウシの角とともに、この建物でおこなわれた儀礼行為を復元する手がかりとなる。

3. H11 区の調査(遺跡南側斜面)

2024年の調査では、新たな調査区として、遺跡の範囲の南東部分に相当するH11区において発掘を開始した。H11区も含む遺跡の南側斜面では、新石器時代の建物を構成していたと考えられる石列が一部地表面に露出しており、この区域の調査によって新石器時代の集落構造を明らかにすることができると考えたからである。また、H11区のすぐ東方では石灰岩の岩盤が広く露出しており、この発掘区はおそらく新石器時代の集落の東端に相当するものと考えられる。

実際に発掘調査を開始すると、表土の直下からすぐに複数の遺構が検出された(図2)。現状では、19m×15mの範囲から少なくとも9基の建物が確認され、



図2 H11区(南側斜面)遺構分布状況。

かなりの密度で遺構が構築されていたことが明らかになった。これらの遺構はそのほとんどが半地下式の円形プランの建物であるが、その大きさは直径が3.5mほどの小型のものから直径が8mに達する大型のものまで存在する。こうした建物の大きさの違いが何に起因しているのか、今後遺構の調査を通じて明らかにしていく必要がある。また、建物の壁が二重に巡る事例もあり、遺構間の機能の違いについても検討していく必要がある。

20号建物

発掘区北側中央から検出されたこの建物は、北側が一部発掘区外に広がるものの、ほぼ全体を調査することができた。南壁は直線に近く、全体では三角形(おにぎり形)に近いやや奇妙な形状をしているが(図3)、その理由も調査の過程で明らかになった。南壁はその東端・西端とも東西の壁と組み合っておらず、明らかに後から付加されたものであることが確認された。東壁・西壁とも南壁を超えてさらに南側へと続いていく状況がうかがわれ、20号建物の南方ではそれに対応する石列も一部検出されている。すなわち、ここには一段階古い時期の建物(27号建物)が存在し、20号建物はその建物の東西壁を利用しつつ、途中に南壁を構築することによって新たに建物としたと考えることができる。あるいは、何らかの理由で27号建物を修復する必要性が生じた際に、規模を縮小する形で建て替えがおこなわれたと評価することができる。

20号建物は東西の最大幅が約5.5mあり、深さは最大で0.8mほどである。壁の構築方法は、一部に大型の石を使用している部分がみられるものの、基本的には比較的小型の石を積み重ねて構築されており、残



図3 H11区20号建物完掘状況。南側に一段階古い27号建物(未発掘)の壁が部分的に確認できる。

りのよい部分では12段ほど積み重ねられている。建物の東側部分では、岩盤を掘削して壁の最下部と床面が作出されている。南西部分には石灰岩の小礫を固めて作られた床面が残存しており、本来はこうした床面が岩盤の上に全面貼られていた可能性がある。また、岩盤上からは、カップ・マークのような直径15cm前後の穴が計18基確認された。

遺構の覆土からは、大小様々な大きさの石が出土したが、その中には平凸形の石、石柱の破片、入口の枠石(ポータル・ストーン)の破片なども認められた。打製石器の分析はまだ完了していないが、エル・ヒアム尖頭器や比較的大きな半月形細石器などが出土しており、遺構の時期は先土器新石器時代A期(PPNA期)に年代づけることができると考えられる。

21号建物

発掘区北側の西部から検出された21号建物は、内径の長軸が約3.6m、短軸が約3.0mの楕円形プランをもつ半地下式建物である(図4)。壁の石は大型の板石を縦に置いた部分が目立つが、小型の石を積んで壁を構築している部分もある。建物の深さは、最大で0.9mほどである。

建物の南側を中心に、石灰岩の碎石を固めた床面が検出され、床面に据えつけたような形で大型の板石も出土した。この板石の中央には、円形の窪みが認められる。建物の東壁からは、壁に接する形で上下に重ねるようにして置かれた動物の頭骨が出土した。これらの頭骨は野生ウシ(オーロックス)、野生ヤギ、野生ヒツジのものであることが確認され、火を受けて変色している様子もうかがわれた。この建物を放棄する際に、動物の頭骨を用いた儀礼が執り行われたと考えること



図4 H11区21号建物完掘状況。

ができる。

23号建物

発掘区の中央部から検出されたこの建物は、長軸が約3.5m、短軸が約3.0mの楕円形プランを呈する半地下式の構造の建物である(図5)。壁は板石を一段、縦方向に並べることで形成されており、それが全周する形となっている。床面は岩盤によって形成されているが、床面は平坦ではなく、全体に南に向けて傾斜していく様子がうかがわれる。また、建物の南東部には壁の外側にコの字状をした突出部が付属している。

建物の中央やや北寄りの場所から、床面である岩盤に掘り込まれる形で、直径0.3m前後の穴が1基確認され、これは柱穴であった可能性がある。建物の西壁付近からは、床面の直上で野生のヤギの頭骨が角とともに検出された。骨は火を受けているような様子はなく、21号建物での状況とは異なっている。

このほか、22号建物は二重の壁をもつ特殊な構造をしており、26号建物は21号建物によって一部壊れていることが判明している。また、発掘区南西部か



図5 H11区23号建物完掘状況。建物南西部の壁際から野生ヤギの頭骨が出土した。

ら検出された24号建物のように東西幅が8mに達するような大型の遺構も確認されているが、いずれも調査はまだ完了していない。

このように、H11区では多くの遺構が密度高く検出されたが、今のところ切り合い関係にあることが確認されたのは2つの建物だけであり、居住期間はそれほど長期にわたるものではなかったと考えることができる。また、チャクマックテペ遺跡では、大型の特別な建物以外の遺構間においても、建物の規模に明確な違いがあることがわかってきたことは大きな意味がある。今後は、こうした遺構間の差違を十分意識し、当時の集落構造や社会のあり方に迫っていきたいと考えている。

■参考文献

- ・三宅裕、板橋悠、シャーヒン・ファトマ 2023「石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民—トルコ、チャクマックテペ遺跡第2次調査(2022年)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』14-17頁 日本西アジア考古学会
- ・三宅裕、板橋悠、シャーヒン・ファトマ 2024「石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民—トルコ、チャクマックテペ遺跡第3次調査(2023年)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』13-17頁 日本西アジア考古学会
- ・Şahin, F., Miyake, Y., Uludağ, C. ve N. Polat 2024 Çakmaktepe 2022 Yılı Kazı Çalışmaları. 43. *Kazı Sonuçları Toplantısı* Cilt 1, 453-470.